

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

古事記について

天地初めて 開けしとき

今回は、古事記の一番最初の所から
もう一回振り返ってみたいと思います。

古事記の一番最初の部分は、『天地の初
めて開けしとき』と書いてあります。天地、あめつちが初めて開
いたとき、天地の初めて開かれし時にどうだったかという事が書
かれています。

天地初めて開けしとき、高天原になれる神の名は天御中主神、
次に高御産霊神、次に神産霊神、この三柱の神はみな一人神であ
って、『身を隠したまいき』、要するに、私達の目には見えなかつ
た、お姿は見えませんでしたということです。

そうは言われても、多分皆さんは今でも神様のお姿は見えませ
ん。神様がお姿を隠している訳ではないけれど、皆さんには見え
ない。早く見えるようになって欲しいと思いますけれども。

一般的に言いますと、私達の世代に近い神様ほどよく見えます。

◇ 目次 ◇

皇紀二六六四年二月七日横浜定例講演会より

・ 古事記について

天地初めて開けしとき	： 一頁
地球創造の造化三神	： 二頁
宇摩志阿斯訶備比古遲神様	： 三頁
天之常立神様・国常立神様	： 四頁
国狭槌神様	： 五頁
豊雲野神様	： 七頁
夫婦のはじまり	： 七頁
桃籬木神様・桃籬実神様	： 七頁
言葉の乱れは世の乱れ	： 十頁
伊耶那岐神様、伊耶那美神様	： 十頁
読者からのお便り	： 十二頁
事務局便り	： 十二頁
これからの行事予定	： 十五頁
これからの講演予定	： 十六頁

だから古事記であつても、神武天皇様以下であれば、私達が皆さんと会っているのと全く同じ、総天然色でお会い出来ます。ただ天照大御神様位までは見えますけれど、神世七代の神様、それから別天津神、古くなればなるほどいわゆる透明に近い状態になります。

まして大神様の場合は、高天原の神様であり、大宇宙の神様ですから、ある意味では透明なセロファン紙というか、今で言えばサララップに透明な枠があるというふうな感じにしか見えないことが多いのです。おそらく皆さんには中々見えなと思います。

しかし、そこからくる風圧というか威力というものはもの凄いですから、いらつしやるという感覚は強く感じます。お出になっただけでポイントとこちらが吹き飛ぶくらいです。しかしそのお姿を見ようとすると、そういう感じは、やはり高く貴い神様ほど、私達の目からは見えにくい。しかし、もう天照大御神様以降、特に神武天皇様以降であれば、私達と全く同じ状態でお会いすることが出来ます。

地球創造の 造化三神

ここで大事なものは、天御中主神様と高御産靈神様と神産靈神様、このお三方のことを『造化三神』と申し上げておきます。このお三方が地球を創造されたという形をとっているわけです。

『造化』と言いますのは、地球創造の『造』と、生成化育の『化』から来たものです。創造神であり、そして物事を造り生み成長させそして育てる、そういう神様です。造化三神とはそういう意味合いを持っています。

ここで私の方であまり沢山のことを言うと、却って皆さんにはわかり難くなってしまうだろうと思いますが、天御中主神様、この方を頂点にして、高御産靈神様、神産靈神様、このお三方を造化三神として一体だとみる考えもあります。けれども、実際に接してみますと、この高御産靈神様は天津神様の系統、そして神産靈神様は国津神様の系統と言いますか、国津神様のことをご担当されています。

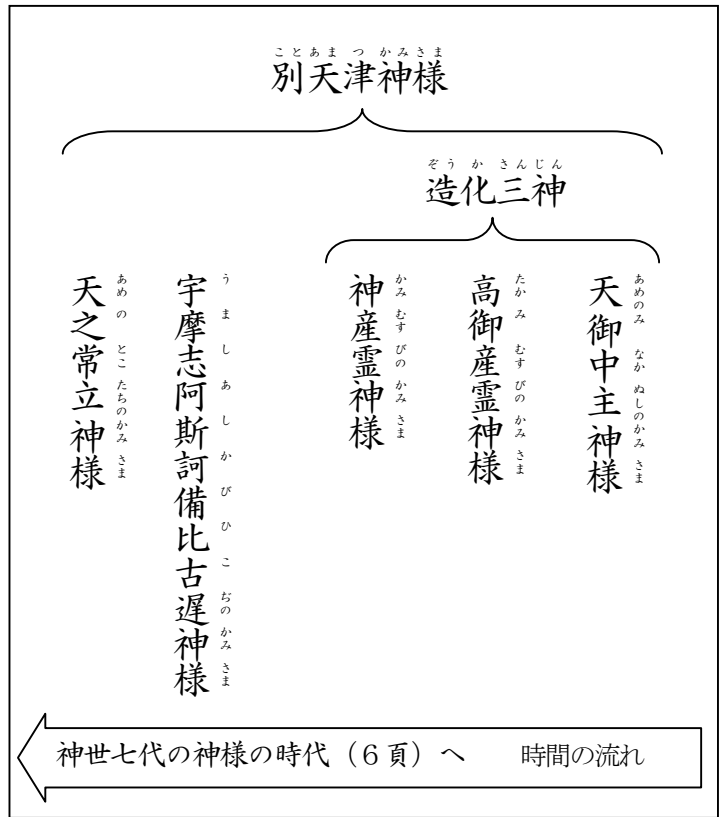
神様の世界は『念』という思いが中心で、次に言葉が来て、字は全部当て字です。ですから、『つ』は『津』を充てる場合も『都』を書く場合もあります。要するに最初に言葉ありきであつて、言葉そのものが大事なのです。

ですからこの後、神世七代に出てくる三代目の宇比地邇、須比智邇神様の場合は、大きく袖が濡れたという意味で、大濡煮という字を書く場合もあります。ですから、文字は全部当て字だと思つて下さい。読み方の方が大事なのです。

天津神様、国津神様というのも、どう違うのかというと、天津神様と言うのは、いわゆる天孫降臨系、後で天照大御神様のお孫

最初に、別天津神様の中の造化三神、天御中主神様、高御産霊神様、神産霊神様というお方がいらっしやって、ここで一行あいています。

最初に、別天津神様の中の造化三神、天御中主神様、高御産霊神様、神産霊神様というお方がいらっしやって、ここで一行あいています。



様邇邇岐命様が高天原から降りてこられるという、要するに高天原から降りてこられた神様の系統が天津神様。そして出雲の国を中心として元々大地にいた神様が国津神様というふうに覚えておかれたらいいでしょう。

最初に、別天津神様の中の造化三神、天御中主神様、高御産霊神様、神産霊神様というお方がいらっしやって、ここで一行あいています。

神世七代の神様の時代 (6 頁) へ 時間の流れ

宇摩志阿斯訶備比古遲神様

別天津神様には五柱の神様がいらっしやるけれども、いわゆる霊格がここで大きく変わって

きますよという意味です。お造りになった神様は造化三神のお三方。そうしてお作りになられた後、いわゆる相当の時間が経って、そして宇摩志阿斯訶備比古遅神様。

『うまし』というのは、『志』で『し』と読んだり、その次が『あし』と『瓦斯』の時のように『斯』と読んで『足』としても同じです。あしかびひこぢの神様。『うまし』というのは、祝詞を書く時に美わしい、これでもうましと読みます。現在の祝詞を書く時などは『美』これで『うまし』です。

この辺りはずーっと一人神、独身という形になっていますから、そのままでも私の方も行きますけれども、中身としてはウマシカミとそれからアシカビノカミとどちらでもヒコヂというところで繋がるのではないかと、ウマシヒコヂノカミとアシカビヒコヂノカミといらっしやるのではないかという気がするのですが、一人神と言われています。

これは色々なものが混じり合って、カビであるとか物事の小さなそういったカビに近い様な、そういったものが寄り集まって次々と次の段階に入るのですよという、そういう段階がありましたよということです。